

九十年代の毛沢東伝説

—神格の諸相をめぐつて—

加藤千代

はじめに

中国の八十年代以降、改革開放時代の現代伝説において、神々の顕現すなわち流行り神に関するうわさは、ひとつの話群を形成して大きな地位を占めるものである。ほかの地域と比べて、たとえばJ・H・ブルンヴァンの諸本や日本の資料にはその話柄が少ないところからいって、流行り神伝説は、中国当代伝説の特徴的なサブジャンルといえよう。その中で、八十年代半ばから九十年代の今日にかけて、かのイデオロギー帝国に三十年間にわたり君臨した毛沢東（一八九三～一九七六）の、死後の顕現と靈験に関するうわさが全国的に流布されているのである。

九二年から九四年にかけ、私が口頭採録・文献収集した毛沢東伝説資料（八二話）は、話される出来事の時期により三つの範疇に大別できよう。第一は祖先の墳墓の風水、出生、新中国建国までの奇瑞・奇跡譚。これは伝統的な帝王伝説つまり真龍天子譚と私は考える。第二は建国から文化大革命を経て死去まで。じつはこの時期の伝承は建国初期のものを除いて極めて少ない。なぜ少ないのかが

論点のひとつになろう。ただし文革時代は、王權の狂氣ともいうべき話柄が大量の“笑話”として知識人により記録されている——反構造の笑いとしてしか表現されえない出来事もまた毛沢東伝説の特異なカテゴリーと考えられる。第三は死後の顕現と靈験である。

本稿では第三の死後の靈験譚、それも九十年代の出来事としてうわさされる資料に限って対象とする。事例研究の域を出ないものであるが、主たる関心は流行り神的出現をする毛沢東の神格にある。

現在の人びと、とくに人口の七割を占める農民層の信仰伝承は、共産主義イデオロギーによる、あるいはユートピア・ヒステリーによる四〇年間におよぶ迫害をくぐりぬけ、八十年代以降、公けに復活しつつあるが、伝統的な神界の旧ヒエラルヒーは中断されていたため、現在は極めてアナーキーな様相を呈している。その実態を毛沢東伝説を手掛かりにして記述し、同時に毛沢東の神格の諸相——交通安全のお守りから天帝までの位相を読む。結論として九十年代の毛の神格は伝統的な真龍天子のパラダイムをもつて語られ、伝説のテキストそのものが、天人合一の伝統的な宇宙像を表明するものである。しかし毛の神格が最高神から有象無象の小神の機能まで付与されているのは、毛沢東が帝位に就いてからの神界への迫害の逆

説的結果であると読み解く。

一、靈驗譚の数々

靈驗譚の大半は現世利益を説くものであるが、テーマとしては交通安全、子授け、病氣治しの三つに分けられよう。

a、交通安全の守り神

靈驗譚の最もヴィジュアルな指標は、車のバッカミラーにかけられたプラスチックケース入りの毛の写真（または肖像画）である。

八十年代末から現われたといわれるが、そのピークはやはり生誕百年の九二年から九三年にかけての一年間であろう。当時北京に暮らしていた私は、タクシーや大学のマイクロバスなどがほぼ例外なくそのお守りをぶらさげていたのを見ており、また友人の話によれば、全国的な勢いで流行していたようだ。五年前の現在は、北京や重慶での私の短期滞在中にはすでに見かけることはなかった。

では、その由来譚は何なのか、様々な異伝があるが典型例を二つあげる。第一例は私が九三年二月に石家庄市で知り合いの男性（四七歳）から聞いた話である（カッコ内は筆者、以下同じ）。

もとはといえど廣州でこんなことが起きたからだ。あるとき交通事故が置いた正面衝突した中巴（中型バス）のうち、一台の方はみんな無事だったのに、相手の一台はこわれて人が死んだ。なんともなかつた車の方には毛主席の写真がフロントガラ

スに二枚はりつけてあつた。というのは運転手の親父さんが老幹部で毛主席を敬っていたので、安全を祈つて貼りつけていた。このことが運転手から運転手へと伝わって、みんなが次々と毛主席の写真をはりつけるようになったんだが、ガラスに貼りつけるより掛けたほうが良いということで今みたいなケースにいれて飾るようになった。去年のことだったか、ここ石家庄の人々が廣州にかけて行き、毛主席の写真ケースを一枚何マオ（日本円で約七、八円）かでたくさん仕入れてきて、ここで一枚を三ヶイ六マオ（三元六角、日本円で約六〇円）で売り、なんと一〇万元（一元は当時十七円）も儲けたということだ。

この廣州あるいは中国南方の、バスやタクシーの衝突事故という由來譚は最もボビュラーなもので、北京でもドライバーから二、三度聞いたことがある。次の例は北京師範大学の学生が湖南省長沙に帰省した九四年一月に、ある女性（五〇歳、看護婦）から聞いた話。なお湖南は毛澤東の出身地である。

数年前、ある運転手が矮寨坡（峠の地名）を越えようとしたとき、その途中、小さな店で毛主席の肖像を見つけた。何やら急に買う気がおこり、それを買って車の前にかけて運転した。その日はあいにくの雨模様で、峠の道はそのうえ霧が深く、一寸先も見えないほどだ。それでも運転手はやっとのことで峠を越え家にたどりついた。人の話では、その日峠を無事越えたのは彼一人だけで、ほかの十数台の車はみんな谷底に転落したというのだ。その運転手はびっくりして、何で自分だけこんなに

運が良かつたのかと首をかしげた。でも、あとで毛主席の画像が彼に向かってニコッとはほえんだのを見て、実は主席が自分を守つてくれたことに気づいた。

毛沢東の写真や絵像が、交通安全の守り札として浮上してきた現実的背景には、急激な車の増加に対する道路建設や、交通法規整備の遅れによる事故の多発があることはいうまでもない。本稿の論点から第一に問題とすべきは、自動車の守護神という中国にあっては比較的新しい神格が、毛沢東のみの特殊な現象なのかどうかであるが、必ずしもそうではない。例えば赤い布やヒモをサイドミラーに結んだりする場合がある。赤色は伝統的に陽気を表象し、避邪の機能をもつ。仏像などの飾りをフロントガラスにかける例を私は九五年に重慶市のタクシーで見たことがある。

さらにケース入りの写真は、一種類ではなく、何種があつたことに注目したい。最も多いのはケースの両面とも毛沢東で、一面は天下取り以前の延安時代のやせた精悍な毛、もう一面は晩年の例の太つた無表情な毛である。他の例は、毛沢東と周恩来を組み合わせたもの。周恩来（一八九八～一九七六）はやはり毛と同様、死後シャーマンを介して顕現したりして数々の靈験を頼している（後述）。さらには伝統的な財神・武神である趙公元帥との組み合わせもあるという。趙公は、伝説では漢代の張天師（道教の祖）の弟子である。従つて、毛沢東の交通安全神としての位相は、突出した地位にあるものの、他の神位を排除するものではないといえる。この現象は、文革時代の毛沢東と比較するとき、まさに隔世の感がある。

いわゆる個人崇拜が極点に達して、全知全能の最高神にして地上の皇帝であった毛沢東、その毛沢東をしてそもそも交通安全神などという卑小な神位に就かせるなどは、毛を冒涜するものであり、趙公という「迷信の権化にすぎない仙人」などと横並びに並ぶことなど想像すらできないことであり、人民がそんな行為をすれば、まさに万死にあたるのであった。それは、ちょうど日本のかつての御真影を想起すればわかりやすいだろう。

毛の肖像そのものの威力については、よく知られるこんな話がある。八九年五月二十三日、かの天安門事件の直前の、学生たちが民主化要求に天安門広場に集まるさなか、ある地方（湖南という説もある）からきた学生が、天安門の毛の肖像にペンキをかけた。と、一転にわかにかきくもり、雷鳴がとどろいて土砂降りの雨となつた。この話は毛の肖像の神像化を端的に語るものである。ただ、政治的脈絡としては、毛主席がお怒りになつた、人民をここまで追い込んだ党の指導者に対して怒りを発したという読み方がある。

第二の問題点として由来譚が全国的に流布した要因についていえば、一つに運転手という移動性に富む職業集団（中国ではマイカー・ドライバーはまだ少なく、職業としての運転手である）が主な伝承者であったこと、二つに、上述の石家荘の話にあつたように、守り札を売る商人が仕掛け人として存在したこと。これに限らず、八十年代後半から起つた毛沢東ブームそれ自体が多分に商業主義的に仕掛けられている。大型の肖像画、写真、バッジや語録（文革時のそれらが骨董的高値を呼んでいる）、出版物、レコード（文革時の

毛沢東贅歌を主とした、ナツメロ歌曲のアンソロジー）等々の売上
げは莫大なものという。

毛沢東が一面では商品となつた現在、靈驗譚は、商品流通に欠か
せない宣伝廣告の役割をも果たすことを強調すべきだらう。次に引
く記者のレポートは、そのあたりの事情を生き生きと伝えている。

b、病氣治し、子授け

「上海文化報」八九年三月二四日号の記事の一段である。

（八八年七月、広西壯族自治区への取材旅行中、ある町でバ
スが休憩を取つたときのこと）道端の露店の本屋に毛主席の
「標準像」（例の天安門に掲げられている肖像と同じもの）が
並べられていた。大小様々な規格品がみなそろつていて。近づ
いて値段を尋ねると、一枚一、二元だといふ。これら肖像のも
ともとの定価は数分（一分は一元の百分の一）に過ぎないとい
うから、数十倍の高値だ。肖像のすみに「広西人民出版社、一
九七八」と印刷されている。

露店の主は中年女性だ。私たちがしげしげと肖像をながめる
のを見て、ここぞとばかり身をのりだして言った。
「にいさん、一枚もつていきなさいよ。家ん中に貼れば苦難さ
んや闇羽さんよりずっと靈驗あらたかだよ」

「まさか」

「何がうそもんか、こんなことがあつたんだよ。貴県に陳とい
うじいさんがあつて、年は七十いくつ。ある日突然病氣になつ

た。飲み食いできず、ねたつきりとなつて虫の息だつた。ところがある晩、夢の中で、毛主席が家においてになり、じいさんと握手して『丈夫にな』と声をかけてくださつた。それから何日かたつと、なんとまあ不思議なことに、じいさんはケロッと治つてしまつた。前よりもピンシャンして、顔もつやつやになつたんだつて。」

「それは、たまたま運よくそうなつただけじゃないの？」私たちはわざとさぐりをいれて言つた。

「いくら運がよくつたつて、こんな御利益にあずかるもんかね。うそだと思うなら、もう一つ話してあげるよ。防城にある夫婦がいて、つづけざまに三人の女の子が産まれた。四番目を身ごもつたんだけど、県の産児制限が厳しくて、中絶手術を受けにいくことになった。ところが、その前の日の晩、女房が夢を見た。毛主席が現れてニコニコして「男の子を授かって、おめでとう」とおっしゃつた。夢から覚めて、夫婦はその夜のうちに逃げ出して外地に身をかくしてしまつた。何か月かたつて、はたして、まるまるとふとつた男の子が生まれたんだよ。あんたら、これが御利益じやなくて、なんだといふんだい。あたしが思うにはね、今の世の中、何ひとつ頼れるものがない、毛主席あのお方を信じないで、いつたい誰を信じろといふんだい」

とまれ、この話はきわめて意味のある問題をつきつけてい
る。革命事業に生涯をかけた毛沢東が、いつたい何故、守り神や

子授け観音になつてしまふのか、である。そのあとの取材でわかつたことだが、毛主席の肖像を家の中に掲げることは別に特

殊なことではなく、ごくありふれたことであつた。（邱利民、

徐放政「在毛主席像的背後」、前掲書十四頁）

この記事は中国の活字資料には珍しく、うわさ話のテキストとして二重の価値をもつ。毛沢東の夢中託宣の噂を提供するばかりでなく、それが語られる場つまり話し手と聞き手の位相が如実に記述されているのだ。絵像売りのおばさんはまだ元らんがための宣伝文句を越えたところで、『あんたらは勝手に理屈をこねればいいさ、あたしらは喜んで毛主席を信じるしかないんだよ』と叫びにも似た本音を告白し、一方の取材記者は都會育ちのインテリとしてのとまどいを正直に表現している。後述することだが、都會の知識人による毛沢東ブームに関する論述は、大半がこの種のとまどいから出発している。偉大な革命家にして思想家がなぜ死後に伝統的な民間神の役目を担わねばならないのか、よりによって毛沢東が生前、封建主義の人心を惑わす元凶として攻撃し排斥したその民間神にである。このところが理解できないとまどいである。ちなみにかつて毛沢東は三大格差（農業と工業、農村と都會、労働者・農民と知識人）の解消をスローガンに打ち出したが、改革開放の今日でも様々なレヴェルで大きな課題であることに変わりはない。

毛伝説の伝承について、こうした良質な記事に出会つて私達が気付かされるのは、マスメディアの関与である。病氣治しの流行り神が樹神や蛇仙ならば、マスコミは無視しても、こと毛沢東となれば事

情が違つてくるのである。さて毛沢東の夢中託宣による病氣治してあるが、実は周恩来にもうわさがたつことがある。

（吉林省長春市、七八年）

ある人が重い病氣にかかりた。あ

る夜、夢の中に周總理が表れて「病氣を治し、禍を防ぐには赤い布のベルトをしなさい」と教えた。その通りにすると病氣はたちまち治つた。その噂を聞いて人々は真似をした。私はつけなかつたけれど（九一・二、筆者が北京にて採録）。

流行神の顯現による病氣治しのうわさは七〇年代末から八〇年代初めにかけて全国的に流され、その主要なタイプは樹神・活き菩薩、蛇仙などが顯現して薬を授けるというものである。これに関してはすでに拙文「流行神のうわさ、その位相——八〇年代中國農村の事例をめぐって」⁽³⁾で論じたので、ここではくりかえさない。毛沢東の病氣治しはそれらのいわば焼き直しであるというにとどめたい。

子授けの靈験は、病氣治しと同じく夢中託宣のモティーフをもつものの、周恩来と置き換えが可能というわけにはいかない。この話は、悪名高い一人っ子政策への抵抗をテーマとする。人々の脳裏には、かつての毛の政策による産めよふやせよの時代が想起されたはずである。毛は五〇年代に経済学者の馬寅初の『新人口論』を批判し、軍事力としての人口増加を提唱した。実は、そのツケが今日の一人っ子政策であるから、極端な産児制限の元凶は毛沢東という皮肉なめぐりあわせにある。

なお一人っ子政策の中でこの事例のように男児を得るために四人目を生む、しかも他所へ身を隠してというのは、噂話の誇張ではな

くて實際の出来事であり、農村ではとくに豊かな村では罰金を払つて二人が三人生むというのが一般的といえる。中國の現代伝説の中で、一人つ子政策にまつわるうわさは、ひとつの話群を形成しており、注目に価する。(拙文「中國の『新都市伝説』—男と女の話」本誌十四号、九〇・三を参照されたい。)

以上、靈験譚の数々を記述したが、このレヴェルにおける毛沢東の神格の位相は、流行り神という概念でくることができよう。毛沢東の死後の顯現を流行り神のコンセプトで論究したものは、中國の関連文献にも見当らないが、流行り神の普遍性、すなわち流行り神の特徴である次ののような出現形態をもつものである。「流行神の発生の仕方には、たえずくり返す要素がある。まず最初に奇跡または奇瑞のようなものが現れる。夢中の託宣とか、土中から神・仏像が掘り出されたり、それの祟りがあつたりして、神の靈顯が説かれる」(宮田登「近世の流行神」一九七三、三二頁)。その靈力が奇瑞のようなものが現れる。夢中の託宣とか、土中から神・仏像が掘り出されたり、それの祟りがあつたりして、神の靈顯が説かれる」(宮田登「近世の流行神」一九七三、三二頁)。その靈力が奇瑞のようなものが現れる。夢中の託宣とか、土中から神・仏像が掘り出されたり、それの祟りがあつたりして、神の靈顯が説かれる」(宮田登「近世の流行神」一九七三、三二頁)。

八十年代半ばから農村では大小さまざまの祠堂や廟宇の建立が全般的に行なわれたといふ。とくに改革開放の恩恵を受けて富裕になつた南方では顯著のようである。毛沢東が地域共同体の廟に祀られた例を見てみよう。

(1)、福建省の石獅といえば改革開放後、その名を知られるようになつた地域であるが、衣料品・靴・時計・ポルノビデオ・ニセ薬などの製造と販売により、人びとの度肝をぬくような小商品王国となつた。ところが王国の住民は富めば富むほどにその富を失うことに不安を覚え、ついに「神」を祀ることに思はずつた。その神はもうかつての觀音菩薩や土地神仙ではない。ボサツさんたちが数千年にわたつて我々先祖の供物を食つてながら、人間の命運を改めてくれなかつたじやないか。それに比べて我々のために死んだ英雄は、今でも我々の胸の中に生きこまれている。というわけで、住民は寄付を集め、二人の烈士(革命に殉じた英雄、英靈)をまつる廟を建て塑像を安置して、その名を「大軍廟」とつけ、烈士を「大軍神」と呼ぶことにした。しばらくして大軍廟の付近にもう一つ、もつと立派な「領袖廟」を建立して、毛沢東を祀つた。参拝にきて跪き、焼香し、経をあげる人はとだえることがない(黎宛水『再上神壇的毛沢東』九三・九、哈爾濱出版社 三頁、要約)

二、廟に祀られて

(2)、「中国青年報」の報道によれば、九二年冬、四川省簡陽県雲龍鎮において住民が自発的に「毛主席記念堂」を建立した。寄付をあつめて建てた瓦ぶきの廟には、毛沢東、周恩来等先代のプロレタリアート革命家の輝しい偉業を盛大に記念する」と大書してある。廟内の正面の壁には毛主席の肖像がかっており、両側には農民たち自らがつくった五星红旗(国旗)が一枚づつ飾られローソクとともにされ、線香の煙がたたよっている。(中略)巫婆(女シャーマン)の類の心術不正なるものは入室厳禁という規則がある。こここの農氏はきわめて剛直な気質をそなえている。それは毛沢東に対する信仰と関わりがあると思われる。九二年十一月、中央テレビ局のニュースに、農民が鎮政府の負担加重を裁判に訴えて勝訴をかちとったという報道があつたが、その事件はこの雲龍鎮で起つたことである。

(黎宛水の前掲書、一六一頁)

次は革命聖地のうち最も名高い延安(陝西省北部)の事例である。延安は中国共産党が長征のあと三六年から四八年まで十三年間にわたりその中央指令部を置いた、いわば解放区の首都であった。

(3)、延安の清涼山には山頂に太和殿、山麓に万仏洞(隋代六世紀の開削)があつて老子と釈迦が一つの山に共存している。しかしこれらの神格(菩薩、土地神、老子、釈迦)より上位に位置付けていることである。ここで浮彫りになるのは、建国までの革命斗争の中で、英靈や元勲が祀られ信仰を得ていたこととの連続性である。また(2)のシャーマンが毛主席記念堂に入ることの禁止規定は注目に値する。現今の大廟建設ブームは、シャーマンの仕掛けによるものが多く、政府のシャーマン活動禁止条項(刑法一六五条)によつて摘発される例も聞く。また再建される廟の多くが伝統的な神格を勧請していることも事実である。そんな中で、毛主席記念堂

不孝者を教えきとしてその非を悔い改めさせた。朱老総(紅軍の総司令)は泥棒を罰して盜んだ財物を返すようにさせた等々。人々がいっせいにひざまずいて厳肅な面もちで口々に唱える、「敬愛する偉大な領袖、毛主席、今日、私は貴方様の私心と斗いります」。この祈りは、まるで文革時代の「朝の請訓」や「夜のご報告」である。(蘇聰、賈魯生「不落的太陽」『芙蓉』九一年六期、十一、十二頁。カッコ以外は要約)

訳注①「文革の初期に全国的に励行されたこと。「朝の請訓」—毎朝、起床すると必ず偉大な指導者毛主席の肖像を三拜した後、毛主席の『万寿無疆』を祈念し(中略)晩の『ご報告』—就寝前、まず朝と同様の三拜と祈念を行なつたのち、「その日の反省を報告する。(注①)余川江編(一三頁)

これら三例の注目すべき共通項は、建国の元勲と地元の英靈を祀るという、民間神勸請の原初的な方方が際立つており、しかも、それらを伝統的な神格(菩薩、土地神、老子、釈迦)より上位に位置付けていることである。ここで浮彫りになるのは、建国までの革命斗争の中で、英靈や元勲が祀られ信仰を得ていたこととの連続性である。また(2)のシャーマンが毛主席記念堂に入ることの禁止規定は注目に値する。現今の大廟建設ブームは、シャーマンの仕掛けによるものが多く、政府のシャーマン活動禁止条項(刑法一六五条)によつて摘発される例も聞く。また再建される廟の多くが伝統的な神格を勧請していることも事実である。そんな中で、毛主席記念堂

という中央政府の天安門広場の遺体安置所の名称をことさらに僭称し、かつシャーマンの関与を排除することは、伝統的な信仰体系と決別した政治的イデオロギーの堅持の表明であり、文革期の延長といえよう。

村落共同体あるいは地域社会が毛を勧請する場合は、交通安全なお守り神という都市型伝承と違って、(3)に顯著のように文革期の様相を残している。文革期の毛の神格化については従来、政治イデオロギー的強制の面ばかりが強調されているが、その反面、伝統的神界との繼承性・連続性の側面のあったことを、私たちは読みとるべきであろう。改革開放といつても農村の農業生産責任制（いわゆる請負制）は土地が赤ん坊から老人まで均分されて、死亡すれば公に返すなど、かつての集団主義が根強く受けつがれている。

ともあれ、以上一章と二章で述べた伝説における毛沢東は対個人と対地域コミュニティとを問わず、いずれも現世利益の機能において通底している。次の終章の三例は、顯現の仕方は流行り神的でありながら、それを超えた神格を私たちに語るものである。

三、天帝となる

北京から西南に二五〇キロ、河北省の省都・石家庄市の付近に耿村という村がある。この村（二八〇戸、一一五〇人）は、民間文学集成事業の中でも民話が四三九二話も採録された“故事村”として全国に名高い所である。私が九三年二月春節に三度目に訪れたときの

こと、村はずれの大仙堂（様々な神位が祀られている）に行つたところ、正面の壁に毛沢東の肖像画（例のスタンダード版）が二枚貼つてあって、村人が焼香をしている。わたしが前回九一年八月に来たときには見なかつたので、今回貼つた理由を尋ねたところ、次のような出来事があつたという。

a、「毛主席が徵兵をする」

この春節のちょうど前、この村の近くの劉村にこんなことがあつた。その村のある家に三人の兄弟があつて、三人の兄弟の子どもといえば男の子がたつたのひとりだつた。その男の子は六才になつていてすごく利口な子だつた。ある日、外に遊びに行き元気に戻ってきたが、その晩、ぼつくり死んだ。三人兄弟は悲しみにくれ、何でこんなことになったか「仙家」（シャーマン）にお伺いをたてた。仙家は神下しをして言つた。

「私は毛主席である。いまでは神位に帰つている。実は蔣介石も今、神位に帰つてるのでこれから私は陰兵（冥界の兵）を集めて蔣の奴と闘うのだ。どつちが勝つか見ておるがよい」これを聞いてみんなはびっくり。仙家に、どうやつたらこの兵役をのがれられるのかと尋ねた。仙家が答えて言うには、家の門にオンドリの絵を貼れば、徵兵に來た陰官は屋敷の中に入つてこられない。それに供物をたくさん燃さなければならん。自分の家の三十才以下の息子や孫の数だけ供物を燃して、陰官に別の場所へ徵兵に行ってもらうようにすればよいとのこ

た。辰年には老天爺が下界の人間を取る年だ。その赤ん坊の言うことには、老天爺は「マニ斗分もの数の子供を天に上らせて童子になさる。ただし、子供に黄色のふちをつけた赤いズボンをはかせて清明節のあとでズボンを燃やせば、この災いからのがれ凶を吉にかえることができる。」（長江「一九八八横豎撇捺」『報告文学』八九年三期、三六頁）

辰年にはさまざまの災難がふりかかるといわれるが、八八年は辰年であった。その十二年まえの七六年といえば毛沢東をはじめ周恩来、朱徳の三元勲があいついで逝去し、さらにあの唐山大地震の起つた年である。八八年もまた経済の大混乱、大規模な山火事や洪水や航空事故の多い年であった。除災のための取越し正月が華北一帯にはやつたのもこの年である。そんな凶年の中での出来事がこのうわさであるが、ここでは、下界の子供を童子に召し出すのは、玉皇大帝と老天爺である。玉皇は「天に玉帝があり、地に皇帝がある」といわれるよう、中国パンテオノンの最高神、宇宙の主宰者、いわゆる天帝である——歴史的にはかなり異動があるとしても、また、ときには道教の最高神といわれたりするが、民間信仰ではいわゆる三教合一（儒仏道合）的な最高神の地位にあるものと考えられる。「老天爺」は、天そのものを人格化した呼称である。ここでは玉皇大帝と同格に使われている。

さて、耿村で耳にしたうわさのシャーマンの解説においては童子を召し出すのは毛沢東に置き換えていた。つまりシャーマンの与える情報の中では、毛沢東は玉皇大帝や老天爺と同格ということ

になる。したがって、耿村の人々が「毛沢東の徵兵」に恐惶を来した理由は、毛沢東を玉皇大帝や老天爺と同一化したためと読むことが出来よう。換言すれば、天人合一という宇宙観が活きているのである。

次に問題となるモチーフは、毛が童子を召し出す目的が、冥界での蒋介石との戦争にあるというくだりである。その前段において毛沢東イコール玉皇大帝・老天爺と読めるならば、なぜ最高神たる神格が蒋介石という下界の指導者と鬭うのか、鬭うまでもなく勝敗は決まっているという矛盾がでてくる。ところが実は次の噂における蒋介石の神格の位相があつて前段のモチーフと矛盾しないのである。その概略をいえば、「毛沢東は天から遣わされた真龍天子であり、蒋介石もまた真龍天子であった。しかし蒋介石は『算命先生』の忠告にしたがわなかつたために台湾へ逃げるはめとなつた。」逃げたといつても台湾では蔣王朝は続いている。だから毛王朝と蔣王朝の勝負はまだついていない、冥界でその勝負をつけようというわけである。真龍天子とは、いわば玉皇大帝・天帝の代理人として遣わされた下界の支配者である。龍は、天の氣のエッセンスとしての最高神、あるいは天帝の近くに仕える家臣、あるいは宇宙の四方神の一つ、という具合に重層性をもつ宇宙動物である。よつて、この真龍というのは、天帝に選ばれた真なる代理人の意と解せよう。なおこの流言は隠喩として、社会主義と資本主義との勝負はついてない、毛はあくまでの社会主義帝国の皇帝を主張してやまないといいうデオロギー宣言であると読むこともまた可能だろう。

b、「生誕百年目のその日、生まれ故郷では」

（北京のある大学生が話す）この話は大学の寮で私のルーム・メイトから聞いたんだけど、彼女の家は毛沢東の故郷（湖南省湘潭県韶山）の近くにあって、去年（九三年）の春節休み（旧暦の正月、二月）に帰省して、その時に聞いたんだって。こんなふうに話してくれた。

「信じる、信じないはあなたの勝手だけど、これは本当にあつたこと。私は自分では見なかつたけれど、家の近所の人達がその眼で見たことだし、それに家の父さん母さんだってちゃんと眼にしたことなんだから、毛主席が靈験を顯したことは証明できると思う。

十二月二十六日（毛沢東の誕生日）のあの日、もともと小雨が降り続いて陰氣このうえない空模様だったのに、その日の朝になると一変して陽がさしてきた。韶山市の人たち、とく韶山峰の人たちは、夜明け前から起き出し毛出席の昔の家に集まり（南京で鋳造された）毛主席の銅像が到着するのを今か今かと待つていたのだったが、このところ半月ばかり一度も晴れたことがなかつたので、その陽ざしを見て、それはとくに強い陽さしではなかつたけれど、村人や他所からの見物人、とくに年寄りたちは、これこそ毛主席の靈験だと思った。

ちょうどみんなが空を見上げているそのとき、ひとりの人が韶山峰から下ってきて大声をあげた。『山腹にツツジの花が咲

いたぞ。一面にまっかに咲いてるぞ、すばらしい眺めだ』このニュースはロ々に伝えられ、あたり一帯に知れわたった。見物人は我も我もと山を登り、まっかに咲くツツジを見ようと思つた。十二月に咲くはずのない花が、あちこち一面にまるでまつかな雲のように頂きをおおつて咲き乱れていた。なんと不思議なことだらう。

でも、もつと不思議なことがそのあと起つた。毛主席の銅像が記念館のまえに備え付けられた。そのとき、空がサーッと晴れあがり、なんと太陽と月が同時に輝きだした。三本足の鳥の太陽、桂花・玉兔の月が天空にキラキラと輝いている。多くの村人は香を焚き祈りはじめた。これは毛主席がおいでのつたのだ、毛主席が靈験を表されたのだと云つて。村民も旅人もあつて取られ、ただ空を見上げている。韶山はたちまち大騒ぎになつた。太陽と月がどれくらいの時間輝いていたのか、私たちは知らないけど、山のツツジの花は、人々が争つて摘んだが、摘んでも摘んでもどんどん咲いて、何日もの間咲きつづけた。私の家の近所の人は韶山へ見物にいき、幸運にもその絶景を眺めることができ、そのうえ花を一束摘んで大事に持ち帰り、何日も飾つた。町の人たちはこぞつてその家に見にいき、いつとき大騒ぎとなつた。みんなはこううわさした、韶山にいけば毛主席あの方の神通力にあずかることができるのだと。

これらのこととは、うわさとなつて伝わり、もつと不思議なことになつた。私は大学に帰ると、汽車の中でこんなふうに聞

いた。あのツツジの花は半月ものあいだ咲いたという。それに、ある人は、太陽と月が同時に輝いたときに、毛主席のお顔を見たというのだ。また、ある人は毛主席の銅像が一瞬、金色に輝き、まるで黄金の体のようになつたのを見たといふ。

生誕百年目、毛沢東が銅像の姿をもつて故郷に帰還したその日にふさわしく、奇跡モチーフがつぎつぎと繰り出されている。ここでは、最も古代神話的アナロジーの『太陽と月が同時に輝きだした』

三本足の鳥の太陽と、桂花・玉兔の月が天空にキラキラと輝いている』というモチーフに限つて読んで見たい。この意味するところを、本稿は古代神話学のコンセプトで読むのではなく、あくまでも九三年に生きる韶山の人々の場からアプローチする。

その日の韶山の人々が、なぜこの日月モチーフを共同幻視したのだろうか。読み方の一つとして、人々の脳裏に、かの馬王堆漢墓から出土した絹布に彩色で描かれた天界像が刷り込まれていたため私は考える。馬王堆は、韶山に近い長沙（湖南省都）の郊外で一九七二年に発見された漢代（前二世紀）の古墳である。墓の主である婦人の遺体が二千年の時間を経て腐敗が進んでいたこと、中国はもとより世界の耳目を驚かせた。長沙にはその博物館があり、その婦人の内臓のホルマリン漬けや出土品が展示され、絹布の宇宙像も復製され掛けである。私は八二年三月に訪れたが、見学者の多さに驚いた記憶がある。湖南の人々にとって、出土品は郷土の榮えある古代史の教科書であり、だれしも一度はそこを見学し、あるいは学校教育で学んでいるものと思われる。

さて、前二世紀に描かれた天界像であるが、最上部の右側に三本足の鳥が赤い輪の中にいる太陽と、左側にガマと兔の乗つた三日月、その日月の中間に人頭蛇身の女神（女媧といわれる）、その下部の左右に二頭の青龍。右側の青龍には龍身にからみつくように扶桑の木（東方にあって太陽がこの木を登つて天空に達してまわるという）があつて、扶桑の枝の間に六個の小さめの太陽があり、順番に天空をまわるのに待機中の図柄のようである。これが図像のごくおまかなか構成である。

日月が韶山の空に同時に輝いたというのは、絹布の図像によつてインプレットされた人々の天界像が閃いたと読み換えることができるのではないか。一般の人々にとって、神話的天界の具体像に関する知識や情報は、この有名な図像をおいて他にはないと考えられる。毛沢東の銅像が然るべき位置に安置されたとき、天界が出現したというのであるから、毛と天界との関わりは、毛が天界から下つてきて銅像の姿でおいでになつたとの認識が人々にあつたといえる。それでは毛沢東は天界のどこに位置するのか。やはり太陽と月のあいだ、天界の中央、図像でいえば人頭蛇身の女神・女媧の位置を占めるべきだろう。人々は日月の同時出現は幻視したもの、人頭蛇身の女神については見ていない。そこは空白である。そこにあるべき毛沢東は今現在、下界に降りているのであるから空白が当然である。

では次に、天界の太陽と月の間に位置する神格は何なのか。図像における女神の女媧は『楚辭』天問篇に早くもその名が記され、二

つの顕著な創業によつて最も偉大な女神とされる。一つは黄土をこねて人間の始祖を造つたこと、もう一つは天が崩れて傾いたとき、五色の石でもつて補天したことである。(袁珂『古神話選釈』七九・

十二、人民文学出版社、一六〇四二頁) 女媧は単に古代神話の文献中のキャラクターであるのみならず、現在でも全国各地に廟があり(文革以後の再建による)、女媧娘娘、人祖姑娘として信仰を集めている。たとえば河南省西華県の女媧城では「天地全神」(最高神)として女媧が現在もシャーマンに乗りうつることが報告されている。ところで、馬王堆の綢布の図像が描かれた前二世紀の頃の女媧について林巳奈夫『龍の話』(九三・一、中公新書)によれば、

「女媧はこの絵の時代ごろ、五人の帝、五帝に先立つて存在した三人の皇、三皇の一人に数えられている。三皇五帝は哲学的な意味を持つた三と五に合わせて伝承の中から選びだされたもので、女媧が五人の帝と並ぶ最高神であつたことは問題ない」(三七頁)とある。最高神が日月とともに表象される例は、前四世紀の出土文物の中の、天帝が日と月を足でぶまえ、左右に龍と虹を握る図像がある(林巳奈夫・前掲書、四十頁)。これは、月日を從えることによつて天帝が宇宙の主宰者であることの表明である。古代の天界像・宇宙像を九十年代の人々がどう継承しているかは難問であるとして、出土文物や考古学の成果によつて、人々がその知識や情報を受けていることは事実としてある。以上、生誕百年のその日、韶山の人々が幻視したものは、天界であり、最高神や天帝としての毛沢東であつたと読むことが可能であろう。

c、「毛沢東は盤古の生まれ変わり」

最後にあげる事例の話し手はシャーマン(七十余才)である。彼女は女媧陵を再建するために、他所にてかけ女媧の靈験を解いて寄進を集める講のリーダー(「会首」)である。彼女が九三月末、河南省鄢陵県で、北京からフィールド調査に訪れた院生を相手に、「人祖爺」(古代神話でいう伏羲)と「人祖姑娘」(女媧)の兄妹婚神話を語り、そのついでにという形で毛沢東の話になつたといふ。

「人祖姑娘」(女媧)は難産のために死んで、西天に昇つて修業にいってしまった。そこで盤古が二度目に転生して、女に生まれ変わり、これら男女の子供たち(女媧の生んだ、人間の先祖たち)を養い育てた。

人間は盤古によつて養われた。その後、盤古はまた転生して毛主席となつた。だからみんなは「実の親の情愛も、毛主席の情愛には及ばない」というのだ。あとで毛主席は誤りを犯した。毛主席をつかわしてこの世に下したとき、その寿命は百四十三才のはずだった。でも毛主席は八十三才でなくなつた。それは六十才寿命を縮められたためだ(六回誤りを犯して、十才づつ命を縮められた)。一回目は、毛主席がこの世に下ったとき、もちろんの神(「大神小神」)をおさえつけたため。二回目は、初級合作社をつくって、右派をやつつけたため。また十分縮まった。三回目は、地主をやつつけたため。四回目は、公

社をつくつてたくさんの人間を餓死させたため。五回目は“白旗”⁽²⁾を抜いたため。六回目は帽子をかぶせて、右派をやつつけたためだ。そのあと老母視は今度また鄧小平を位につけて天下を治めさせ、再び土地を分け与え、田畠を分け与えさせた。

（訳注①文革中に流行した毛沢東を讃える歌曲の一節。②六十年代初期の社会主義教育運動と消極分子の摘発のこと。③文革中、政敵にレッテルを貼って打倒したこと）

この話は、うわさ話というよりは話し手の毛沢東に対する見解と総括である。しかしシャーマンであるため、その見解が人々に流布される可能性は大きい。内容は二つのモティーフからなり、一つは盤古の毛への転生、もう一つはいわゆる功過格の毛への適用である。盤古は古代神話において文献上は女媧よりも遅れて現われるが、中国の創世神話の主役である。盤古は鷄卵のような天地渾沌の中に生まれ、一万八千年かかつて盤古の背が伸びるにしたがい天地が分離したという天地開闢神話、あるいは盤古が死ぬとその息は風雲に、声は雷に、左眼は日に、手足とからだは四極と五岳に、血液は江河にという死体化生神話はつとに知られるところである。盤古は先述の女媧が人類起源神話を担つたのに對し、宇宙起源神話を担つたことになる。

さて、盤古の毛沢東への転生を語る女シャーマンは、自分が日頃お仕えする女媧をさしあいて、なぜ盤古を抜擢したのか、それは不明としか言ひようがない。しかし本稿の関心からいって、宇宙起源神話の立役者である盤古は女媧同様に、あるいはそれ以上に最高の

神格であることが読みとれれば、それで十分である。なお毛沢東の出自が神靈であるという話柄は盤古のほかに白額虎、万龜、神龍、金龍、羅漢などと語られる。個々の説明をする余裕はないが、毛の出自が主に天界の星辰・神格が下界に下つたものというモチーフは、毛が伝統的な帝王であるとの証しにほかならない。

次に、毛沢東が誤りを犯したために寿命が縮められたモチーフであるが、これは道教でいう功過格、すなわち人間の行動を監督する神がいて、人の寿命はその行動の功（善行）と過（悪行）によって増減されるというものである。歴史的に見ると、仏教の中国への伝来によつて、それまで人びとが「天意」としての境遇に甘んじるという宿命観に対し、善果をつめれば来世は変えることができる、あるいは自業自得という主体性が生まれ、さらに道教の現世肯定の觀念によつて、現世の寿命をのばすために毎日の行動の結果を点数（功過格には一つ一つの行いに点数がつけられている）で評定するようになつた。

この事例では、皇帝・毛沢東の治世を功過格の觀念から評定し、毛が六回誤りを犯したため、六十才寿命が縮められたといふ。ここで注目すべきは、天の最高神の化身であつても、さらに化身の地位がたとえ皇帝であつても、いったん下界に人間として生まれたかぎりは、天の裁きを受けなければならないという、伝統的な天命の觀念である。天命、天意といふのは、中国の天人合一のコスモロジーにおいて、即ち人格化された天による天人感應のパラダイムにおいては、天意すなわち民意といふいわば弁証法的統一を意味する。し

たがって事例の中で「毛主席をつかわしてこの世に下したとき」の「誰がつかわしたのか」という主語が欠落しているのは、その主語の明示が必要であること、すなわち言わなくとも「天」であり「民」であることの自明を表している。

四、神格のパラドックス——結びに代えて。

現代伝説による毛沢東の神格の諸相を以上で記述しおえた。最後にこの現象の社会的要因について言及し、やや大きな視点から毛の神格の位相を述べて結びとする。

まず中国の論壇による解釈を紹介したい。数ある毛関連の単行本（九二年末現在で五十余種）の中で、毛ブームを囲った諸本のうち、私が最も理論的整合性をもつと考える『毛沢東の謎』（曉峰、明軍主編、九二・十、中国人民大学出版社、刊行直後、発禁処分を受け）の解釈は次の三点に要約できよう（十一章二節～四節）。

(1) 毛沢東ブームと新たなる「毛沢東迷思(myth)」出現の原因は、いわばユートピア思想後遺症とも名づけるものによる。文革時代、全国民の信仰体系は、共産主義という社会発展五段階説のユートピア精神によつて取つて代わられた。そして、次の改革開放路線によつて、こんどは突然ユートピア思想が無とされ、経済一辺倒になつたため、経済資源は開発されるものの、精神資源の方は逆に欠乏状態に陥つた。人びとの唯一の出口は伝統に返ることであつた。(2) 改革の中で起こつ

た数々のマイナスの要素（官僚の腐敗、インフレ、不正な商売等々）に対する不平や不満が高まり、人びとは転換期のアノミー現象の中ですがれるもの、神秘的な靈力を求め、それが毛沢東神話として現われたのである。(3) 「毛沢東」は、現代中国の超級政治記号として、イデオロギーから「民俗信仰」にむかって演進する最も突出した特徴を内包しつつある。「毛沢東」はすでに「現世の領袖」から「超俗の神靈」に転化したのだ。「毛沢東の神聖と超越性は、真に一つの政治時代が終わることを示すものである」（三七二頁、傍点は筆者）

毛沢東の死後の靈験が流布される社会的要因は、(1)と(2)に指摘されるとおりと考える。しかし、(3)の現代伝説中の毛沢東の位置付けにおいて、「イデオロギー」と「現世の領袖」即ち現実の政界・王権から「民俗信仰」と「超俗の神靈」即ち神界・神権に転化したというのは、政治的表層に眼を向けた解釈であり、いわば民主人士の政治的表明であると読むべきだろう。発禁処分を受けた原因は傍点の部分を含めた、その表明にあると私は推測する。毛沢東は伝説にあっては出生から死後の顕現にいたるまで、一貫して伝統的な王権と神権のパラダイムに在つた即ち天人合一の宇宙像における王権と神権の弁証法的統一に在つたというのが、私の読み方である。もつとも本稿では毛伝説の最後尾のみを囲つていて「予測」というべきであるが。

そのパラダイムの中で毛沢東の場合、歴史上の真龍天子と比較して大きく異なる一点がある。それは、毛沢東が天子として位に登つ

た後のことである。歴代王朝の太祖（開国皇帝）ならば、創業の功臣に論功行賞を行うと同時に、神界に対しても改めて神位を与え、

神界の再編成を行なう、すなわち各王朝は自らの権威付けと秩序維持のために、天帝の代理人として神々のヒエラルキーをも掌握しつつ共存共榮をはかるのである。その実態はたとえば『三教源流搜神大全』（明代、撰者不明）などからも理解される。ところが、毛沢

東の場合は、それを実施するどころか、全く逆に伝統的な神界を封建主義の迷信として否定し迫害し、神々の代わりにマルクス主義・

共産主義のイデオロギーを宣布した。その結果、現実の封建的專制政治⁽¹⁾とあいまって、イデオロギー宣布が宗教的熱狂となつた文化大革命時代には、逆説的に天子・毛沢東が伝統的な天帝にならざるをえなかつたのである。このあたりは、本稿では文革期の事例を扱わないとため具体性にかけるが、それでも上述の事例の中で、「毛主席がこの世に下つたとき、もろもろの神をおさえつけたため（寿命が縮まつた）」と語られ、また他の文献資料で「北平（北京の旧称）がひとたび開放されると、あらゆる妖魔鬼怪（妖怪変化）がいっぺんに消えてしまった。なぜなら、毛主席が入城されたからだ。あの

お方の陽気はすごいもんだ」（長江、前揭書、三六頁）とうわざされるところに、毛の神界抹殺の片鱗が読みとれよう。

改革開放路線後の様々な混乱と社会規範の喪失にあって、人びとがすがる神靈といえば、文革期の延長としての最高神・毛沢東がまづもつて人びとの胸に浮かぶのも当然であろう。また九十年代の毛沢東の神格が、流行り神として現世利益の神から古代神話の最高神

まで引き受けているのは、やはり文革期の延長であつて、伝統的神界の復活と再編成の中の過渡的現象と考えられる。

九十年代の毛沢東伝説は、彼のイデオロギー専制政治の死後の総括を意味し、研究者にとっては、人びとの伝統的な世界観や宇宙像の現在をさぐる、またとない資料といえるものではある。

注

（1） 単行本としては劉濟昆『文革大笑話』八九・六、香港嵐崑制作公司や余川江編『これが「文革」の日常だった』（村山孚訳）

八九・六、徳間書店

（2） 毛ブームの市場に関する記事は極めて多いが、特に詳しいのは張占斌・宋一夫『中国毛澤東熱』（九一・五）の一、二章、黎宛水『再上神壇の毛澤東』（九三・九）の二、五章

（3）『中国の歴史と民俗』（伊藤清司先生退官記念論文集編集委員会編、九一・十、第一書房）所収

（4）楊利慧『中国女媧的神話及信仰』（北京師範大学中文系民間文学教研室博士課程、学位論文、九四、五）一〇九～一一〇頁

（5）アメリカに亡命した作家・鄭義『紅色記念碑』（九三・七、華視文化公司、台北）九章「共産教皇争奪戦」、十章「毛澤東現象秘』に專制・独裁の何たるかが具体的に論じられている。

（かとう・ちょ／広島市立大学）